



*学校便り作成にあたり、生徒の文章や写真を使用する場合があります。浅野川中学校個人情報取扱規程を遵守しておりますが、お気付きの点がありましたら学校までご連絡ください。

22年後の自分から、今の自分が見えるとしたら ～ドラマ『良いこと悪いこと』が突きつける「責任」の重さ～

ドラマ『良いこと悪いこと』は、22年前のいじめという「過去」が、大人になった彼らの「現在」を壊していくという衝撃的なミステリーでした。中学生のみなさんにとって、22年後は遠い未来に感じるかもしれません。しかし、このドラマが描いた「過去は決して消えない」という重いテーマは、今まさに教室にいるみなさんにこそ考えてほしい内容です。



先日最終回を迎えたドラマ『良いこと悪いこと』を観た人はいますか。22年ぶりの同窓会。再会を喜ぶはずの場所に届いたのは、6人の顔が塗りつぶされた卒業アルバムでした。かつての「いじめ」をきっかけに、止まっていた時間が動き出し、悲劇が連鎖していく物語です。

このドラマは、私たちに「善と悪の境界線」について、とても鋭い問いを投げかけています。

1 「その場しのぎ」が一生の傷になる

ドラマの中で最も恐ろしかったのは、加害者の側が「自分たちが何をしたか、ほとんど覚えていなかった」とこと、あるいは「当時はあれが当たり前だと思っていた」ことです。いじめている側は「ちょっとしたノリ」のつもりかもしれません。しかし、塗りつぶされたアルバムのように、被害を受けた人の心は、その瞬間から真っ黒に塗りつぶされてしまいます。その心の傷は、22年経っても、どれだけ時間が流れても、勝手に消えることはありません。

2 「塗りつぶされた顔」は誰のせいか

アルバムの顔を塗りつぶしたのは、犯人かもしれません。しかし、本当にその人を消してしまったのは、当時の教室にいた「見て見ぬふりをした人たち」や「一緒にになって笑っていた人たち」ではないでしょうか。

「自分は直接やっていないから関係ない」「逆らうと自分が標的になるから仕方ない」

ドラマの中の大人たちは、そうやって自分を正当化してきました。しかし、その「小さな無関心」の積み重ねが、一人の人間を追い詰め、22年後の復讐劇を生んでしまったのです。

3 「良いこと」と「悪いこと」の境界線

このドラマのタイトルは、非常にシンプルです。中学生になれば、何が「悪いこと」かは頭では分かっているはずです。でも、集団の中にいると、その境界線がぼやけてしまうことがあります。今のみなさんに問いかけたいのは、「22年後の自分に、胸を張って今の行動を説明できるか」ということです。今のあなたの言葉、今のあなたの行動。それが22年後の誰かを苦しめ、そして自分自身をも追い詰めることにならないか。それを考える力が「想像力」です。

4 脚本を書き換えるのは「今」

ドラマは悲劇的な結末を迎えましたが、みんなの現実はまだ続いています。もし今、クラスの誰かの顔が、みんなの心の中で「透明」になってしまっているのなら、今すぐその色を取り戻してください。

「ごめん」と言う、「やめよう」と言う、あるいは誰かに相談する。

その勇気ある一歩が、22年後の自分を、そして大切な仲間を救うことになります。私たちは、誰かの人生を塗りつぶすために学校に来ているのではありません。お互いの色を認め合うために、ここにいるのです。ドラマの中で、もし誰か一人が「そんなことやめようよ」と本気で言っていたら、未来はどう変わっていたのでしょうか。この学校が、誰にとっても「居心地の良い場所」になるように、私たちが現実の教室でどう振る舞うべきか、一緒に考えてみましょう。